

躍

季刊 [やく]
2011 Spring | 第12号
関西電力株式会社

躍

季刊 [やく]
2011 Spring
Number 12

 関西電力



特集 ● [鼎談] 基軸を探る

日本人づくり、
次代を担う人材育成をどうする？

伊丹敬之／藤原和博／松原隆一郎

関西電力株式会社





表紙

「陽光を浴びて、黒い器に映える木苺の白い花」

春の野で小さな花をつけた木苺（きいちご）を、

かつてインドネシア・スンバ島で使われていた

水牛皮の盾に付けた。

陽光を受けて光る緑の葉、春風にかすかに震える花びら――

プリミティブな器には、

けなげに咲く小さな白い花が似合う。

花／木苺

器／スンバ島の水牛皮の盾

所収／平凡社刊『別冊太陽 花に習う』

撮影／飯田安国



花人 川瀬敏郎 かわけとしろう

一九四八年京都府生まれ。幼少より池坊の花を学び、

日本大学芸術学部を卒業後、パリ大学へ留学。演劇、映画を研究する。

帰国後は流派に属さず、いはば名の原型「たてはな」と、

千利休が大成した自由な花「なげいれ」をもとに、

花によって「日本の肖像」を描くという独自の創作活動が続ける。

二〇〇九年「京都府文化功労賞」受賞。

03

特集①「鼎談」基軸を探る

日本の人づくり、

次代を担う人材育成をどうする？

伊丹敬之／藤原和博／松原隆一郎

19

Visitor's やんか「兵庫編」

「あゝめく海、光射す街、明石」川上弘美

21

特集②「ルポ」MOVE ザ関西

関西の人材力を検証する

36

街の灯り物語

「オンとオフ、灯りで心を切り替えて」進藤晶子

39

エコルーツ紀行

宇宙に最も近い島、

種子島で宇宙と地球を考える 大原まり子

日本の人づくり、 次代を担う人材育成をどうする？

資源小国・日本が今後、資源としていくべきものは人材力ではないか。
とりわけ世界最速で進む少子高齢・人口減少社会において、
一人ひとりの力を、日本社会の持続的発展に不可欠な人的資源と位置づけ、
次代を担う人材を育成していく必要がある。
企業にとっても地域にとっても国にとっても、そして個人の幸福にとっても重要な人材育成をテーマに、
日本の人材力を検証し、針路を探りたい。

伊丹敬之
東京理科大学専門職大学院
総合科学技術経営研究科長・教授

藤原和博
元公立中学校長 大阪府知事特別顧問
東京学芸大学客員教授

松原隆一郎
東京大学大学院総合文化研究科教授

人口減少時代、日本の人材力の現状をどう見ているか？

人がバラバラな個人になる「無縁社会」、
武道に躰が求められている

松原 本日は「日本の人づくり、次代を担う人材育成をどうする？」というテーマです。人材ということでは、よく言われる社会背景として少子高齢・人口減少時代ということがありますが、むしろ私が最近気になっているのは「無縁社会」。単身世帯が増え、人が孤立していく状況になっている。

これは、血縁、地縁、会社の中の社縁などが、この二十年ほどで急激に崩壊したせいではないか。特に高齢者には、それが端的に現れているように思います。

人がバラバラな個人になっていく趨勢があるようですが、人材が、人材が、家族や地元での人づきあい、会社の制度や慣行によって育成されるなら、バラバラになると、人材の力も落ちるというか、何か変化を被っている。ある意味、個人の自由は戦後、日本社会が求めていることでもありますが、振り返ると少し困ったことになっている。

私は武道をやっていますが、新学習指導要領では、これから中学校でも広い意味での武道を取り入れ、集団でつきあうことについて、正課で扱おうとなっている。これまでも武道場に、小学生を連れてくる親御さんは多かった。親御さんは、何も投げたりすることを望んでい

人口学的な計算でも六千万人ほどになるという予測があり、それは前提として考えたほうがいい。

もう一つ、既に日本は成長社会から成熟社会に入っているんです。これは一九九七年と九八年が境目で、一人あたりの脂肪と蛋白質の消費が、九八年から一貫して下がっている。これは成熟社会を端的に現すデータです。要するに、もっと焼き肉を食おうという社会じゃなくな

った。成熟社会というのは、先ほどの指摘のように、みんな一緒に成長する社会でなく、独り独りバラバラになっていく社会。例えば昔ながらの標準世帯、両親と子供二人の家庭で、今のリビングの様子を見れば、息子はテレビゲーム、お姉ちゃんは携帯電話、お母さんは家事をしていて、お父さんだけが、ああ、これが家族団欒だと間違えて酔っている。昔、囲炉裏でしか火を焚かず、そこに集まる以外、飯は食えなかった状況が崩れ、レンジもあればコンビニもあり、個食——独りで食えることが可能になった。みんな一緒に何かすることはなくなり、同時に平均ということが意味をなさなくなる。

三つ目に、少子化は何かまずいのか。少子化と核家族化が同時に起きると、家族は社会じゃなくなるわけです。同時に地域社会が後退したので、子供が大人になるために必要な家族という社会、地域という社会で採まれることがなくなった。昔は学校と地域社会と家庭が三位一体で子供を大人にしていたが、今、その機能が全部学校に押しつけられ、学校にはそれだけの機能はないから、か

るわけではなく、なかなか家庭でうまく教えることができない挨拶、人づきあいの基本の指導を求めているのではないか。躰のためにやらせたいという要望が随分ある気がしています。

その背後には、昔に比べると法事なども減り、遠い親戚と会って挨拶をしたり、叱られたりすることがなくなったことがあるのでしょう。また戦後長らくあった地元の人づきあい、顔は知っているけど、あまり近くないおじさん、おばさん、見知らぬ人との袖のふり方というか、例えば、お風呂屋さん、路地や原っぱでのつきあいもなくなった。

それに代わるものとして、公教育でどういう躰ができるのか。武道に躰が求められるほど人づきあいが下手になっている現状が、特に若者にはあるのかもしれない。

家庭も地域も後退し、

子供を大人にする「斜めの関係」がなくなった

松原 公教育に外部から関わられた藤原さんは、そのあたりをどうお考えでしょうか。

藤原 最初のリードとして、三つ申しあげます。まず、今は人口減少時代だということ。僕は日本は今後五十年ほどかけて、六千万人ぐらいになると思っています。あれだけ世界に版図を広げたイギリスとフランスが、成熟社会を迎えた今、ぐっと引っ込んで約六千万人。日本は

新学習指導要領

知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むため、授業時間数の増加をはじめ、小学五・六年生への外国語（英語）活動導入、中学での武道導入などを改善内容として、小学校では二〇一一年四月から、中学校では一二年四月から実施される。



人がバラバラになる時代、武道に躰が求められている(松原隆一郎氏 提供)

なりあつぶあつぶしている状態です。

なぜ、子供が大人になれないか。僕には仮説があつて、子供が大人になるとき、親と子、先生と生徒という縦の関係だけじゃ無理だと思ふんです。人間が揉まれる「斜めの関係」——兄弟姉妹やおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん、本当の肉親でなくても地域社会でその役割を果たしてくれる利害関係のない第三者。そういう斜めの関係が大事なのに、希薄になっている。

武道の話が出ましたが、僕が校長を務めていた東京都杉並区立和田中学校では新学習指導要領に先立ち、四、五年前から一年生に柔道の受け身をやらせています。なぜならその直前に、ある子供が転んだとき、手をつくという反射が起きず鼻の骨を折った。日常生活で転ぶことを自然に学べなくなっているんです。

斜めの関係がなくなったことが、身体のバランス感覚を奪い、人間関係のバランス感覚まで奪っている。嫌いとなると一切つきあわない。ゼロか一か、敵か味方かの関係が横行し、いじめが鮮烈になっていく。

さらに言えば子供が勇氣を持って何かやろうとすると、背中を押してくれるのは誰か。親は大抵反対しますが、おばあちゃん、おじいちゃんが、やってみろ。孫に対しては、全人生に責任を持つ必要がなく、余裕があるんです。だから斜めの関係が欠乏すると、背中を押してくれる存在をも失うわけで、誰も勝負に出なくなった。日本全体の保守化にも少子化が絡んでいることを指摘しておきます。

人は人のネットワークの中でしか育たない。

社会崩壊をくい止め、少数だから精鋭を育てる

松原 なるほど。伊丹さんはどうですか。

伊丹 お二人の話を聞きながら大切な話が多いなと思つていますが、私はさほどベシミスティックにはならない。人口減少については、年金問題や途中経過の凌ぎ方など難問はありますが、長期的にはそんなに悲観しなくてもいいのではないのでしょうか。もちろんGDPは人口に比例するから小さくなりますが、絶対額が小さくても、一人あたりの豊かさがあればいい。

人口減少ということで、私の頭に浮かんだのは「少数精鋭」です。あれは、精鋭を少数集めるといいという話なのか、少数だと精鋭になるという話なのか——私は、少数だから精鋭になる、大勢いるからぶら下がるやつが出てくると考え、日本全体の人材力を考えればいいと思ふんです。

一方、社会のバラバラ化で浮かんだ一つのイメージは、アメリカの大学に教えに行つたとき、七歳と十一歳の息子を現地の小学校に入れた。学校が引けると、白人の子供たちが遊びに来る。一人親家庭で親が働きに出ている子供たち。うちはおばあちゃんまで連れて行つたから、家庭の温もりがわが家にあるんだね。みんな寄ってくるんだ。それを見て、離婚率が四割に達し家族の形がなくなるようなカリフォルニアで一体この子たちはどう育つんだろうと思つたのが二十五年以上前。



伊丹 敬之 いたみ ひろゆき
東京理科大学専門職大学院総合科学技術経営研究科長・教授、
一橋大学名誉教授（経営学）
1945年愛知県生まれ。一橋大学商学部卒、同大学院商学研究科修士課程修了、カーネギーメロン大学経営大学院博士課程修了。PhD。一橋大学で教鞭を執り、85年教授。この間スタンフォード大学客員准教授等を務める。94年から2年間一橋大学商学部長。2008年より現職。産業構造審議会委員など歴任。05年紫綬褒章受章。著書『人本主義企業』『デジタル人本主義への道』『経営戦略の論理』『経営を見る眼』『イノベーションを興す』『場のマネジメント 実践技術』『技術経営の常識のウソ』など。
http://most.tus.ac.jp/mot/mod_learns/learns03_detail.php?i=a17406

今、日本でも人がバラバラになっているようですが、そういうカーブはどこかで変曲点を迎えることも多いから、何とか押し戻すことをみんなが意識する。斜めの関係の大切さに日本全体が気づき、嫌われることを覚悟して、あえて厳しく接する大人が増えないといけない。これは学校や国に任せても、解決する問題ではない。非常に当たり前の言葉を使えば、「家族の再生」とか「おじいちゃんの復権」。それがもつと日常的に語られるようにならないと、日本の人材力は大問題だと思います。

松原 企業の教育や研修はどんな状況でしょうか。

伊丹 日本企業が研修に熱心だったとは思わないけど、教育には熱心だったと思います。先輩が後輩に教える、教えあう場づくりには、日本企業は非常に熱心だった。それは研修ではない。OJTを、あの手この手でおせっかいなほど熱心にやってきたが、今、それに手を抜き始めた。

その理由は社会全体のバラバラ化。おせっかいをするにはエネルギーが要るし、ノウハウも必要。だけどおせっかいをされた経験がない人が増えている。となると他人におせっかいもできない。仕事の現場での「斜め上からの教育」が減り、人が育つケースが減っている。

バラバラな無縁社会は、絶対に具合が悪い。人は結局、周囲の人のネットワークの中でしか育たない。それが壊れつつあるとすれば、人のネットワークの再生を、地域社会でも会社でも家庭でも心がけないといけない。愚直なメッセージですけど、それを強調する必要がある。

OJT
(On the Job Training)
職場の上司や先輩が部下や後輩に対し、実際の仕事を通じて、必要な知識・技能・態度・価値観などを身につけさせる教育訓練。

もう一つ、バラバラになっていく社会というのは、実は個が強くなるためのプロセスかもしれないと思います。私がイメージしたのは、数カ月暮らしたノルウェーです。フィヨルドの寒々しい景色のなかで、独りぼつんと住んでいる。ここまでバラバラになれば、強くなるぞと。でも人口密度の高い日本でそこまでのバラバラは無理だから、結局はネットワークを重視せざるを得ないでしょうね。

モラルを考える前に権力で規制、 息苦しい社会になってきた

松原 人口減少が大変だという背景には年金問題などがあります。それは子供の世代から無理やり年金をもらわなきゃいけないシステムを前提にしているからだと思います。逆に減っても構わないように、余裕があるうちにシステムを変え、人口の増減に関係ない社会をつくればいい。

もう一つ、自由や平等という考え方自体、バラバラ化を後押ししていると思うんです。例えば禁煙を巡る状況を見てみると、権力で規制していく息苦しい社会になりつつあるんじゃないか。もともとたばこなんて、喫煙者がほかの人に煙がかからないようにすれば済む。なのに、人と人が狭い国土の中でどうやって一緒に暮らしていくかという、つきあい方のモラルを考えるより先に、どんな規制を強め権力でやめさせてしまうのでは、あまり暮らしたい社会にはならない。

ちょっと話が飛びますが、最近相撲の八百長が問題になっています。でも相撲はもともと近代スポーツではなく、興行です。議論を聞いていると、アマチュア相撲のような話ばかり。アマ相撲では八百長をやってはいけない。しかしプロの相撲はあくまで見せるための興行なので、面白くするためのアマとは違うルールがある。

例えば顔への張り手は、スポーツのルールとしてはOKですが、日本の神事として見栄えが悪い、醜いということ内で内々で禁止になったと思うんです。日本は相撲の美という、興行上もしくは神事上の何か曖昧さも面白がる伝統があった。それをアマススポーツのように捉え、潰していくのは、余裕がなくなってるなと感じます。

今、あちこちで余裕がなくなっていて、昔ながらの面白い文化が消えている。経済原理で機会均等という原則だけが突出し、会社でも成果主義になったり。個人の自由か規制かの二者択一で、モラルや文化が閉め出されている。一見、正義であることが振りかざされた結果、どんどん人がバラバラになり、世の中ギスギスして悪循環に陥っている。

日本の人材力を検証すると？

二十四時間の集団生活が人を育てた日本

松原 日本の人材力を検証したいのですが、歴史を振り返ると、江戸時代には「武士道」が人の生き死に、人生観とともにモラルを教え込みました。もう一つは、個人

武士道
日本の近世以降の封建社会における武士階級の倫理・価値基準・行動様式の根本をなす思想。義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義を深く重んじる。



藤原和博さんが校長を務めた和田中学校では、学校の授業と世の中で起きている現実をつなげた「よのなか科」の授業や、学校と地元をつなげてできた「地域本部」主催の土曜寺子屋など、新しい取り組みが実践され根づいている。
記録映画『和田中の1000日』（グループ現代）より

の生き死によりも、むしろお家をいかに残すか。「家制度」は長男が継ぐイメージがありますが、日本では長男よりも家が大事。長男がボンクラなら養子をとります。家を残すため人は死んでも構わないということで、死を覚悟させる武士道があった。

日本人には、もともと自分の勝ち負けよりも団体戦——集団の中で自分も生き、集団をより生かしていく発想があったのは間違いない。

伊丹 だから、一見古く見える日本の江戸時代からの人の育て方のしくみを見直せばいいですね。将来の日本の人材力——人口減少のもとで少数だから精鋭になるためには、そのメカニズムを再稼働させる必要があります。

小川三夫さんという宮大工の棟梁が、宮大工を育てる場所を持っておられます。入りたい人が大勢来ますが、元暴走族とか不良だった人ばかりを採るようにしていると言います。大学を出た人なんて、「大学出てるなら、どこかで働けるだろう。おまえなんかここへ来るな。ほかにもっと鍛えるべき人がいる」と。

それは完全合宿。住み込みで四六時中、二十数人が一緒の部屋に寝泊まりする生活を数年間させる。すると、初めていろんなことにみんなが気づき始める。本当の大工はそうしないと育たないとおっしゃるんです。教室で教師が教えるなんてことじゃなく、二十四時間こそが学ぶ場であると。

とすれば会社などそのうちの十時間とかを過ごすのに、そこで個人別の成果主義を入れ、後輩に教えることを躊

が引くと、いきなり覚え込ませる形の教育に戻った。僕はそれはラッキーだったと思います。日本人に「情報処理力」を付与して、処理力の高いホワイトカラーとブルーカラーの増産に貢献し、欧米へのキャッチアップを速めた。そこでいちいちクリティカルシンキング（批判的思考）をしていたら遅れたわけだから、五十年間はそれで大成功した。

ところが、それに呪縛されている。成熟社会に入って、この十五年ほど日本の足がとまっていると感じるのは、情報処理力を磨いていくと人間が正解主義に陥るんです。正解を速く正確に当てることはできる。ビジョン——手本となる図柄や世界観、真似したい目標などがあれば、どこよりも速く実現することはできる。じゃあ、ビジョンそのものを誰がつくるかという話です。

ビジョンをつくるのは、僕が言う「情報編集力」。それが国際比較の場で用いられるPISA型の学力につながるのですが、それは不得意なまま、今も日本の小中学校の教育は九割方が正解主義。

個性や創造性をめざした「ゆとり教育」は失敗だと言われていますが、僕はそうは思わない。なぜなら、日本のゆとり教育を学んだフィンランドが十五年間徹底的に磨き上げた結果がPISA型学力で、三回連続ナンバーワン。一方、日本では中途半端な取り組みに終わった。文部科学省が総合学習の「例」を示してしまったんです。サンデル先生の白熱授業のように、何のテーマでもいいからディベートをやれと言えば良かったのに、環境問題

踏させるようなバカな真似はするな。むしろもっと社内運動会をやれ、社内旅行をやれ。そういうアナクロニズムの意見を私は持っています。

相撲の話にしても、なぜ相撲は次々に強い力士が育ち続けているのか。おそらく前近代的に見える鍛え方にヒントがある。大部屋で、宮大工の育て方と本質は一緒です。やること自体は個人技だけど、育つプロセスは団体生活。その原点を守っているから育つんじゃないかな。

松原 日本の一つのやり方ですよ。

もう一つ言えば、日本は非常に老舗の多い国。法隆寺をつくった金剛組なんて飛鳥時代の創業です。中国もヨーロッパも百年を超える会社はほとんどないなかで、日本はかなり暖簾が続いている。これは家制度と関係があると思うんですが、今残っている老舗って結構、新しく過激なことをやっている会社が多いらしい。だから古い会社がダメだとは、イノベーションの観点からとも言えない。

「情報処理力」は高いが、
「情報編集力」は低い日本人

松原 さて、戦後に話を移すとしたら、藤原さん、公教育って結局、何の働きをしたんでしょうか。

藤原 日本は戦後、GHQが入ってきた一年ほど、どんな田舎でも、君の意見はどうなんだねという民主化授業——僕がやっている「よのなか科」のようなワークショップ型の授業が行われた。それが朝鮮戦争が始まりGHQ

家制度
家を基本単位とし、家父長権をもつ男子が家族員を統制・支配する制度（家父長制）。長子男系の世襲が原則だが、血よりも家業・家財・家名の継続性を重視。養子縁組で家督を継がせることが可能。

小川三夫 (さかき)
宮大工。伝説の宮大工・故西岡常一棟梁の唯一の内弟子であり、寺社建築専門の建築会社「鵜工舎」創設者。

金剛組
飛鳥時代、五七八年創業の世界最古の企業。寺社建築を専門とする。

よのなか科
学校の授業と世の中で起きている現実をつなぎ、子供と大人が一緒に学ぶスタイルを採る授業。

PISA型学力
OECDが、義務教育を終えた十五歳を対象に二〇〇〇年度から三年に一度実施している国際学習到達度調査(PISA)で問われる「読解リテラシー」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」。正解が一つとは限らない問題に対し状況に応じた納得解を導く力。



藤原 和博 ふじはら かずひろ
元公立中学校長;大阪府知事特別顧問; 東京学芸大学客員教授
1955年東京都生まれ。東京大学経済学部卒。リクルート入社、新規事業担当部長など歴任、93年からヨーロッパ駐在、96年同社フェロー。2003年より5年間、東京都内では義務教育初の民間人校長として杉並区立和田中学校長を務める。世の中と教室をつなぐ「よのなか」科などユニークな教育を実践。08年大阪府知事特別顧問。著書『人生の教科書[よのなかのルール]』『人生の教科書[人間関係]』『35歳の幸福論』『はじめて哲学する本』『つなげる力』『さびない生き方』など。
<http://www.yononaka.net/>

か国際理解が情報か福祉・ボランティアとか言ったため、国際理解では英語、情報ではコンピュータを教えるという具合に再び正解主義の教育がはびこり、現場が混乱して、学力派に揺り戻されて終わった。今また日本は情報処理力偏重に戻っているが、これはアングロサクソンや中国、インドの思うつぼ。経済を支配する側としては情報処理力の高い労働力は使いやすい。そういう人をいまだに日本は大量生産している。

人的資源の育成へ、日本の針路と課題は？

**恒産なくして恒心なし——食い扶持を稼ぐため
輸出型だけでない国際競争の担い手を育てる**

松原 問題が山積しているようですが、今後の日本の針路と課題に話を進めたいと思います。

今、世間で言われているのは、国際競争力が落ちてきたので人的資源を何とかしなきゃいけないということ。ただ私は、そもそも国際競争力という話が変わったと思うんです。日本は経済力が小さかった時代には輸出立国が可能だったが、今のようになると外国にものを売る国際競争力は円高を促進するだけ。むしろ日本国内で、ガラパゴスだろうが何だろうが、世界に類を見ない浮世絵みたいな独創的なものをつくったほうがいいんじゃないか。

外に向けての人材育成より、世界に何を言われようとも自分たちで面白いと思うことを競いあう競争力。そう

いう場が国内にできないといけない。外を気にしてビクビクしない人材育成、自分たちが面白がることのできる場が成熟社会じゃないかと私は思うのですが、いかがでしょう。

藤原 輸出産業型でない針路のヒントは、星野リゾートの社長に聞いた話。日本人が海外旅行に行き、金を使うのがアウトバウンド、海外から日本に来るのがインバウンドで、予測では二〇一七年頃にアウトバウンドをインバウンドが超えると。日本は観光資源が豊かで、今、富士山が見える別荘が中国の人にがんがん買われている。京都はもちろん行きたいし。日本人が思っている以上に、日本は安全で清潔で、もてなしの心がある。外国の人たちが日本に来て金を使ってくれるところを輸出だと。

松原 サービスの輸出ですからね。

藤原 だから各観光地がどれだけ面白いコミュニティをつくるか。その知恵を出す国民にならなきゃいけない。

伊丹 日本が得意なことをやるのはいいいが、今後ますますグローバル化する世界で、七千万〜八千万人の日本人がそこそこ豊かな生活をできるだけの経済力を維持した上でなければ、「恒産なくして恒心なし」。だからまずは日本人の食い扶持をきっちり稼ぐ国際競争力が大切です。

単に輸出産業を再生させるだけではなく、世界で日本人の活躍の場を拡げるための国際競争力。外国から富士山を見たい人を連れてくるのも立派な国際競争力です。あるいは外国で事業活動を行い、そこで生まれる資源の一部を日本に還流させることによって、日本の豊かさを

イノベーションを担う人材育成のための大学院で学ぶ
社会人学生(東京理科大学専門職大学院 提供)



キープする。これも国際競争力です。そう広く捉え、そういうことができる人材を育てないといけない。

妙な平等主義が人を潰す、

「偏って尖った人」を伸ばす工夫を

藤原 だから僕は情報編集力と言うんだけど、小学校なら一割程度、中学校で二〜三割、高校で五割程度は、正解主義でなくクリティカルシンキング。誰かが何かを言ったとき、ちよつと待てよと。それは裏から見るとどうなのか、上から、下から、左から、右から見たらどうかという複眼思考で考える。それが正解主義の処理力に対し、修正主義ともいえる編集力を育てる。やってから人の意見を聞いて修正し、自分の意見を進化させていく。それをしないと、成熟社会を楽しく生き抜く子供たち、自分の人生を編集していく子供たちは育たないんじゃないか。

伊丹 それはどうでしょう？ 編集力みたいな教育をシステマティックにできるのか。アメリカで子供を学校に行かせた経験では、編集力を育てるというより、先生が手を抜いてる感じ。結果として子供に編集力がつくことはあるが、手を抜けば一方で情報処理力は落ちるんです。

松原 私は公教育で情報処理型は高校まではある程度必要だと思えます。例えば、塾は悪いと言われますが、受験用に文学作品のエッセンスだけ読ませたりするので、息子はあれで突然、本を読むようになった。

ただ、大学で情報処理型だけをやるのはまずい。大学で

マイケル・サンデル
(1963〜)

米国の政治哲学者。ハーバード大学での講義「Justice（正義）」が史上最多の履修学生数を記録。二〇一〇年NHKでも「ハーバード白熱教室」として放映された。

星野リゾート社長 星野佳路(1960〜)

軽井沢の老舗旅館 星野温泉(現 星野リゾート)の三代目社長。破綻した大規模リゾートの再建も手がける。

恒産なくして恒心なし
ある程度安定した財産がないと、心も動揺しがちで、安定した状態を保てない。孟子の言葉。

は卒論を書くことに全力を尽くすようにして、もつと学生同士や先生とつきあうなかで何かを学んだほうがいい。

ちなみに私、柔道部長をやっていて、柔道部卒論というのをやらせている。ビデオを撮るだけですが、自分が四年間でオリジナルに考えたと思う技をやれと。

伊丹 なるほど、そういうのいいね。暗記力に優れた学生が優秀な成績をとるのは全然違う次元の話ですね。

松原 違いますね。習うだけでなく、団体生活で四年間過ごして工夫したことを一つ形にするのは良いかなと。

人材は集団の中で育成されるというのは全くそのとおりで、集団というのは触媒の働きをしているのではないかと。人と話しているうちにアイデアが浮かんだりする。個人の頭の中だけで完結して、いきなり発揮できるようなタイプのクリエイティブって、実はないんじゃないか。

だから、良い企業というのは触媒型の場合が存在している企業。大学も、勢いがある大学にはそれがある。

伊丹 情報処理力だけの公教育をやっても変な人は必ず出てくるから、それを潰さない社会のほうがいいと思いますね。編集力に優れた人って実は処理力が高すぎるくらい。中途半端な処理力の人が一番編集力がない。

世の中は、ごく普通の人が大勢いて、「偏ってるけど尖った人」が少数いてというバランスが、大多数の最大幸福ではないか。編集力が豊かで偏って尖ってる人って、別に日本だけでなく、どの国でも少数派。多数派である普通の人のレベルを上げるのが公教育の基本だと

思うから、情報処理力で構わない。

ただ日本は、少数派がさらに息苦しくなるような社会の状況があるから、そこは直したほうがいい。偏ってるけど尖った人を、どうすれば拾い上げられるか。おじさんが背中を押すのか、上司が引っ張り上げるのか。そういうしかけをどうつくるかが、国としては本質的な問題ではないか。だけど、ここで妙な平等主義が必ず障害になるんです。

藤原 僕は長男が小学校に入学したときリュックで行かせた。そしたら初日に自分以外がランドセルなのを見て、泣きながら帰ってきた。日本には全員揃ってというカルチャーがあり、それがどれほどの暴力かということに気づいていない。ここを改めないと多様性は生かせない。

例えば、親が日常的にクリティカルシンキングをしていると、子供にも刷り込まれると思うんです。それを増やしていかなきゃいけないんじゃないか。

伊丹 今の日本は半世紀ほど前と比べ、偏ってて尖ってる人が減り、「偏ってて尖ってない人」が増えている。これは具合悪いよ。自分勝手なことをして、権利を主張するだけ、他人と折りあいが悪いだけだもん。(笑)

松原 確かに駅前の飲み屋で頑固なおばちゃんがやってる面白い店とか減ってます。日本社会は均質だといわれたが、昔のほうが変わる人が大勢いた気がします。

伊丹 日本は実はそんなに均質ではなかったんですよ。表面上の行動パターンとして同じようにやるべきところはやるという躰が効いてただけじゃないかな。よくアメ

リカはクリエイティブな人が大勢出るといわれるが、あれは本当に勝手なやつが多いんです。その中で本当に能力のある人だけが育つ。一方で育たない側は、実は大勢が惨憺たる状況。でも、こんな過密な日本でそこまでの状況は、社会全体がそのストレスに耐えられないと思うから、そのルートは諦めるしかないというのが、私の平たい感覚です。

団塊世代はリタイア後、校長・学園長として 学習コミュニティを進化させる

藤原 情報編集力を磨く具体策は二つあります。一つは、情報編集力もコミュニティの中で揉まれないと養われない。だから学習コミュニティをつくるのが大事です。

例えば、ここ五年ほどで第二の人生を始める団塊の世代一千万人の十人に一人が地元に戻れば、百万人。彼らは知識、技術、経験が豊富で、おそらく住宅ローンも子育ても終わっていて、余裕があるんです。そういう人たちをボランティアとして学校教育の中に導き入れる。学校の外で地域対策としてやるのではなく、学校の中でサポートしてもらい、地域全体で学びあう学習コミュニティをつくる。

これは図書室を大人もいられる空間に改造することも大事だけど、「よのなか科」のような、大人の生涯学習と子供たちの学校教育を融合させ、大人と子供と一緒に学べる授業。例えばハンバーガー店の店長になったつもりで、どこに出店したら一番儲かるかを一緒に考えてプ



松原 隆一郎 まつばらりゅういちろう
東京大学大学院総合文化研究科
国際社会科学専攻教授
(社会経済学、経済思想)
1956年神戸市生まれ。東京大学工学部卒、同大学院経済学研究科博士課程修了。85年東京大学助教授、のち教授。消費社会化した資本主義の分析には定評がある。著書『日本経済論——国際競争力という幻想』『分断される経済』『長期不況論』『失われた景観』『思考する格闘技』『消費不況の謎を解く』『経済思想』『武道を生きる』『豊かさの文化経済学』、共著『共和主義ルネッサンス』など。国際空道連盟大道塾四段、同塾ビジネスマンクラス師範代。柔道三段、東大柔道部長。
<http://homepage3.nifty.com/martialart/>

学習コミュニティ (学校支援地域本部)

子供たちの学びを豊かにするために、保護者と地域が力を合わせて学校を支援する組織。和田中学校では、学生ボランティアによる「土曜寺子屋」、司書ボランティアを巻き込んだ「図書室改造」、地元商店街や町内会による「校庭緑化」、進学塾と提携して優秀な子をさらに伸ばす夜間授業「夜スベシャル」などのプロジェクトを行っている。

レゼンしあうとか。そういう正解が一つではない授業を、新しい時代の学習エンターテインメントにしていこう。楽しくないと団塊の世代の人たちも来ないと思うんです。お金が発生するわけじゃないから、自己犠牲では続かない。小中学生と一緒に学ぶと楽しいというコミュニティをつくると、実は学んでいる大人の姿から、子供たちが学ぶんですね。それを僕は三年ほどやっていて、全国に学習コミュニティが約二千五百カ所できてきた。

これを進化させる条件としてもう一つの策は、攻めのマネジメントができる校長。教員経験しかない校長だと、守りの管理しかできない。だから今、約三万人いる小中学校長の十分の一、三千人ほどは民間などから来てほしい。ただ、校長には専任義務があり、誰でもできるわけじゃない。そこで、大体、中学校一校に小学校二校で構成される校区の上に、学園という概念をつくる。学園長は外から入れ、学習コミュニティにするための外側のネットワークづくりとか、授業を面白くするプロデュースをやる。これは非常勤で、年齢問わずいい。

伊丹さんなら孫が通う小中学校区に、自分は百億円あるから三十億円寄附して伊丹記念講堂を建てるとか。

伊丹 そんなお金、ないよ。(笑)

藤原 じゃあ、七億円で体育館、千五百万円で図書室とコンピュータルームを一体化したメディアセンターとか。実は今、日本の個人金融資産千四百兆円を持っているのは、団塊以上の世代。この層が金を使うとしたら孫なんです。だから孫の学校教育と生涯学習を結びつけるこ

私が今、研究科長をしているのは、技術者のための夜間と土曜日だけのビジネススクールです。子供の教育に金のかかる四十歳前後の人たちが、百万円以上の授業料を自分で払って学びに来る。日本再生の鍵はこの人たちの再教育が握っているかもしれない。彼らはバブル崩壊後に就職して、失われた二十年をまがき続ける日本経済のなかで仕事人生を送ってきた。その前の世代は、自分の努力以外の力もあってかなり成功経験をしているのに、この世代は成功経験をした人の比率が少な過ぎる。

企業によって人の育ち方が違う。あの会社は人が育っているなという会社と、この会社は不思議に人が育たないねという会社が明確にある。仕事の場のあり方が悪い会社は人が育たない。育たない会社の人たちは、萎縮しているんです。その人たちに、そうでもないよ、こう考えればいいと、物を考える場を提供する。こっちが知識を伝達するなんてことでなく、もう一遍、リ・オリエンテーションすることの大切さをつくづく感じています。

私はそれを七十歳までの仕事にしようと思っているので、残念ながら藤原さんのアイデアには乗れないんです。松原 私も最後に申しあげると、私は今、町道場で七十人ほどのおじさんたちのクラスをみています。それで言えば、武道は紳士・淑女の社交場です。若い者は勝ち負けを競いますが、年寄りはこの汗を流した後、ビールを飲みながら、来し方・行く末、いろいろな話をします。

とで、千四百兆円の一割でも落ちてきたら、すごい経済効果。その拠点として、僕は「地域本部」という名で全国に二千五百カ所、学習コミュニティをつくった。それを進化させるために、校長なり学園長の強化が大事なんです。

明治の元勳には退役して学校長になった人が多い。『坂の上の雲』で有名な秋山好古は陸軍大将までやって、定年後、元帥になってほしいという依頼を固辞して、ふるさとへ帰って中学校の校長をやった。大将までやった人がスパッと辞めて、地元で自分のネットワークを生かし、自分の知識、技術、経験を若い人たちに移植することに命を賭けたわけです。

それが今の日本は何なのかと。定年後もしがみつくのではなく、日本人の美しい生き方として、あと五年間ぐらいやれる元気なうちにスパッと辞めて、地元で学園長になって、自分が築き上げたネットワークを全部つなぎ変えてから死ぬ。そういう生きざまを団塊の世代の人たちは示してほしいんです。

萎縮している四十歳前後に仕事の成功体験を、会社人間は地元での社交場づくりをもう一度

松原 伊丹さん、いかがですか。

伊丹 私は最近、中年になりかかった日本人の再学習意欲の大きさを感じていて、その人たちが改めて目覚める場を提供するのが私の仕事だと思っているから、藤原さんの話はいい話だけれども、私は乗らない。(笑)

考えてみると、私はたまたま武道でつきあっていますが、女性は江戸時代から一貫してお茶、お花でつきあってきた。男は一時期、会社に関心ももったから、世間でのつきあいはなかったんですが、ヨーロッパではクラブチームという形で、地元で草サッカーをやったりしながら、みんなが集まり続けていたのです。

似たようなことが成熟社会の日本であっていい。大学で学び直すことはもちろん、それ以外にも、地元の、武道でも、お茶、お花でも、何でもいからもう一度やり直してもいいのではないか。学校の部活でも教える人がいなくて部が潰れていますが、そのときは六十歳ぐらいで、地元で教えたいと思っています。

している元気なおじさんに来てもらおうといい。得意なこと、やりたいことで人と人をもう一度つなげればいいのかないと、私は感じています。

きょうはありがとうございました。躍



『坂の上の雲』
司馬遼太郎の歴史小説。明治という近代日本の勃興期、登っていけばやがてはそこに手が届くと思いい焦がれた西洋近代国家を「坂の上になびく雲」にたとえ、秋山好古・真之兄弟と正岡子規の三人を主人公に、近代国家日本の形成を大きな時代の流れの中で描いている。

秋山好古(1869～1930)
愛媛県松山市出身の陸軍軍人。「日本騎兵の父」と呼ばれ、陸軍大将まで務めたが、一九一四年、退役し、北予中学校(現愛媛県立松山北高校)校長に就任。

*なお、東京理科大学専門職大学院「総合科学技術経営研究科」は二〇一一年四月より「イノベーション研究科」に名称変更。

長男が生まれる少し前に、明石に引っ越した。確か季節は春、海に近い街だった。隣町に行くときに乗る海沿いを走る電車から見えるキラキラ光る海と、のんびり眠気を誘う乗り心地を、今も覚えている。まだ明石海峡大橋が完成する前のことだ。

老夫婦が営む小さな寿司屋で食べた生のアナゴのにぎり寿司、とれたてのタコが入った明石焼。魚の棚商店街をのぞくのも楽しみだった。関西の魚が珍しく、生きたシャコを初めて見た。殻つきのまま茹でて、何もつけずに食べるとおいしくて。トゲに刺されながら夢中で食べた。『溺れる』という短編で男女がシャコを食べるシーンは、その味の記憶で書いたものだ。

東京で生まれ育った私にとって、初めての関西。標準語で喋ると遠まきにされる——そんな思い込みは杞憂に過ぎず、誰も何も気にしていなかった。娘の公園デビューで知り合った「ママ友」は、なじみのない土地で不安な初の子育てを楽しいものに変えてくれた。公園の砂場でお喋りしたり、ビーチパラソルを抱え、お弁当を持って、みんなで海まで歩き、日暮れまで浜辺で遊んだりした。

「兵庫編」

きらめく海、光射す街、明石

川上弘美 作家

私にとって明石は、明るい街、さんさんと光の射す街。明石にいる間、私の胸はいつも新しい空気に満たされていた。転勤や旅行でさまざまな土地を訪れたが、しつくりくる場所、そうでない場所がある。それは理屈ではなく、人と土地との相性としか言いようがない。明石と私は、幸運にも相性が良かったようだ。

出会った人たちが素敵だったから、この街を好きになったのかもしれない。東京は少し人との距離が遠い気がする。明石は距離の近さが嬉しかった。近いと言っても、あるところから先へは決して踏み込まない。会話は「落ち」をつけて締める。これは文化だなと。長く同じ土地に人々が集まって住むなかで培われた文化。離合集散の東京と異なり、おおらかでほどよい距離感の明石で過ごした一年余りの日々は、とてもあたたかいものだった。

その後、仕事のついでに明石を訪ねた折、おぼろげな記憶をたどって街を歩いてみた。老夫婦の寿司屋がなくなっていたのは残念だったが、変わらないでいるのは難しいことだと思う。放っておくとなくなってしまうなかで、変わらないということとは常に新陳代謝を繰り返し、新しくあり続けること。だから変わらないでと簡単に言うてはいけない気がするが、それでも言わずにはおられない。初めて子供と暮らした明石は、ある意味、ふるさといえる場所。いつまでも明るい光の射す、元気な街であってほしい——いささか勝手ながら、遠くからそう願っている。 曜



かわかみ ひろみ 作家
1958年東京都生まれ。94年「神様」でバスカル短編文学新人賞、96年「蛇を踏む」で芥川賞。2000年『溺れる』で伊藤整文学賞、女流文学賞、01年『センセイの鞆』で谷崎潤一郎賞、07年『真鶴』で芸術選奨文部科学大臣賞。他の作品に『光ってみえるもの、あれは』『ハヅキさんのこと』『風花』『どこから行っても遠い町』『パスタマシーンの幽霊』『ゆっくりさよならをとる』『東京日記——卵一個ぶんのお祝い。』など多数。

<http://webheibon.jp/blog/tokyo/>

関西の人材力を 検証する

地域社会の持続的発展に不可欠とされる人的資源。
幾多の時代や社会変化を超えて、独自の歴史的風土と
文化・生活様式を守り、伝え、磨きあげ、多様な人材を育ててきた関西。
そのユニークな人材力の秘訣を考えるため、各地の現場を訪ねてみた。



ドアのないオープンな空間で授業を行う福井市の至民中学校。
この日は2011年度入学予定の小学6年生向けに、英語科の
体験授業が開かれていた

「少人数授業」と「業間体育」

「この問題わかる人いるかな?」。先生の問いかけに、子供たちが一斉に手を挙げる。当てられた男の子は、嬉しそうに電子黒板の前に立ち、分数の足し算をすらすら解いた。授業と授業の間の休み時間には「業間体育」。二時限目が終わると、子供たちは縄跳びを手に廊下や体育館へ飛び出していった――福井県永平寺町の志比しひ小学校は活気に溢れていた。

福井県は文部科学省が小・中学生を対象に実施する「全国学力テスト」「全国体力テスト」とともにトップクラスを誇る。その原動力の一つが、少人数授業と業間体育だ。県内の小学校では、一クラス三十一人以上になると、一・二年生は担任と低学年サポート教員を、三年生以上の算数・理科などではチーム・ティーチング（T・T）として二人の教員を配置し、きめ細かな指導を行っている。志比小学校校長の宮下洋一さんは「教員は特に学力下位の子供が理解できるよう指導しています。でも、実はそこよりちょっと上の成績の子供たちの中に、授業をうまく理解できていない子供がいることがある。T・Tや少人数の授業だと、その層にも目が向きます」と効果を話す。

一方、業間体育については「スポーツ少年団で日々運動する子供とまったく運動しない子供との二極化が進むなかで、学校で毎日、一緒に汗を流すことは体力増強にとっても効果的」だそうである。

これらのきめ細かな学校教育の背景には、福井県が六十年近く続ける独自の学力テスト、体力テストがある、と福井県教育長の広部正紘ひろべ せいこうさんは言う。県や市町村の教育委員会が毎年テストを回収、採点し、分析。その結果を各学校に返し、学校現場で児童生徒の弱点強化を進めてきた。「教育委員会の職員自身が採点するからこそ、弱点に気づきやすい」と、広部さんは話す。

学校・地域・家庭が一体となった教育

「福井では教育行政と学校現場が協力して改善方法を考え、各学校の教員が実情に応じた形で教育活動を行ってききました」と言うのは、二〇〇八年春に新築移転して開校した福井市の至民しみん中学校校長の塚田雅洋つかだ まさひろさんだ。同校では、新築移転にあたり、現場の声を生かした新しいスタイルを導入。生徒が教科ごとに専門教室

に移動して授業を受ける「教科

センター方式」と、全学年

の生徒を縦割りに分けて学

校行事や総合的な学習を行う

「異学年型クラスター制」を県

下で初めて採用したのだ。

至民中学校のもう一つの特色

は「地域連携」で、多くの地域ボ

ランティアがいる。全国各地から

見学に訪れる教育関係者の案内など



- ❶冬、雪に閉ざされる福井県では、授業と授業の間の「業間体育」で全校児童が廊下や体育館で縄跳びなどに汗を流す。永平寺町の志比小学校にて
- ❷県内の小学校では、地域ボランティアが下校時の安全を守る「見守り隊」を結成。福井市の旭小学校では低学年対象に約80人が活躍
- ❸ノーベル賞学者・南部陽一郎博士や漢字・文字学の第一人者・白川静博士など福井に関わりの深い学者の業績を積極的に教育に生かしている、と語る福井県教育長の広部正紘さん。県内の小学校では、漢字解説本『白川静博士の漢字の世界へ』を活用
- ❹志比小学校の3年生たち

学力・体力トップクラスの教育力

福井



“学力トップクラス”を支える少人数の授業。永平寺町の志比小学校3年生の算数の授業では1クラスを2つに分け、14人で行われていた



心学明誠舎が主催する定例早春セミナーには、石門心学の思想や石田梅岩の考え方を学ぼうと50人ほどが訪れた

よき企業人を育てる、石門心学の倫理観

先見的な「顧客満足」の経営思想

「お望みの方は遠慮なく、女中方は奥へ」。江戸時代の改革期であった享保期（一七一六～三六年）に、石田梅岩が提唱した石門心学の講席の軒端には、こう書かれた招き行燈が出されていた。厳しい身分制度のなか、梅岩はすべての人に学ぶ場を無料で提供した。その講席には、商家の主人や番頭、女性や子供など、多くの人々が詰め掛けたという。

梅岩は一六八五年、現亀岡市の農家に生まれ、京都の呉服商に奉公に出た。のちに、番頭にまで出世したが、その間、勉学に励み、四十代半ばで退職。自ら悟った実践的な人生哲学、商人道徳を、町人向けにわかりやすく説いた。やがて、多くの弟子が育ち、京や大坂をはじめ、日本各地に心学講舎が次々と誕生した。

どうして、町人をはじめ藩主に至る多くの人々が、石門心学に耳を傾けたのか。現在わずかに残る心学講舎の一つ、大阪の心学明誠舎副理事長の中尾敦子さんによると、貨幣経済が発達するなか、金儲けは賤しいこととさげすまれていた商人階層に、勤勉、正直、儉約を旨とし、「商人が売って喜び、相手が買って喜ぶ」、いわば顧客満足に徹して利益を得ることの大切さを説いたからだという。過度な利益ではなく、見合った利益を当然の権利と

も担い、教員を教育業務に専念させている。毎年、地域の人々が生徒と一緒に授業を受ける地域公開講座や、地域住民の絵画や彫刻、写真の展示など、地域の文化交流活動の拠点にもなっている。

このような地域連携は、福井県がこれまで培ってきた学校、地域、家庭の三位一体となった教育活動の風土から生まれてきた。広部さんによれば、どの小学校にも多くの地域ボランティアがあり、学校菜園の野菜づくり指導や低学年への本の読み聞かせなどに努めている。

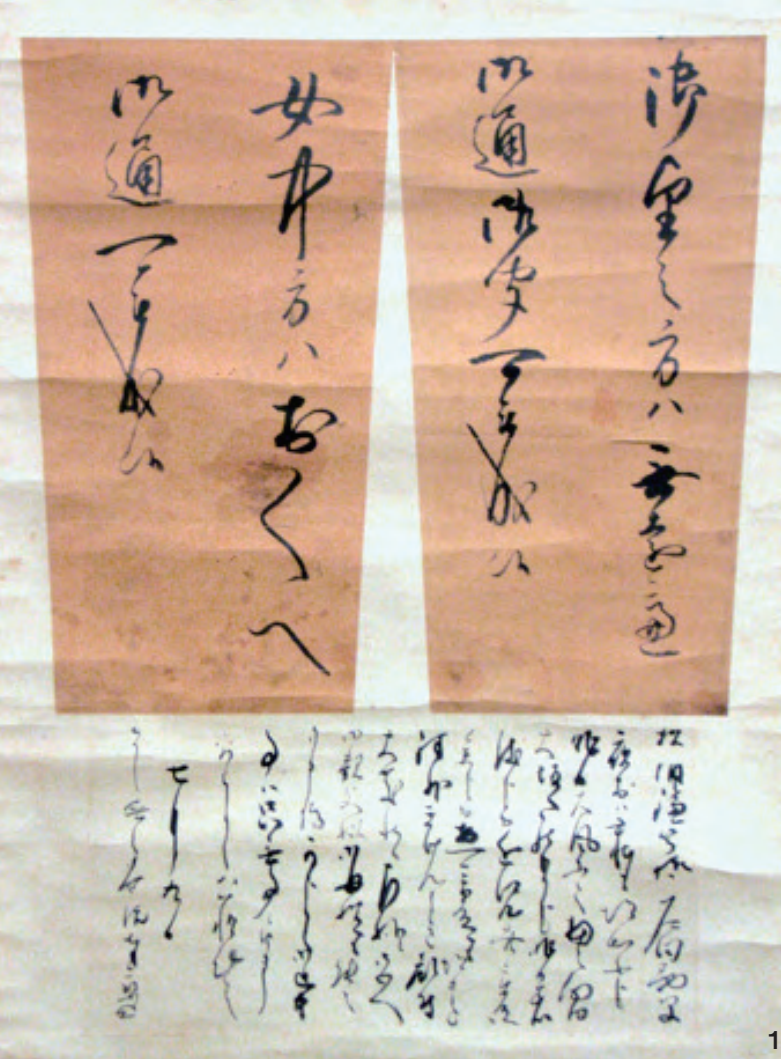
また、家庭も教育に熱心だ。三世帯同居率は全国二位で、宿題が他都道府県と比べて多いなど、家族が見守るなかで学ぶという習慣が定着。例えば、国語の音読学習は、家族が聞き、大きい声だったか、句読点で区切ったか、などを評価するという。「生活習慣をみても、福井県の子供たちは、早寝・早起き・朝ごはんをしっかり守っています。これは、家庭の躾が行われていることの証明です」と広部さん。今後は保育園・幼稚園から高校までの連携をより深めて、環境変化のギャップを小さくすることで、不登校を減らしたいと力を込めた。

もともと、教育熱心な地域・福井。江戸後期には名君として知られ、藩校を開設した福井藩主・松平春嶽など教育に尽力した先人たちがいる。彼らの精神を受け継ぎ、地域の未来を託す子供たちの教育に、全県民が一体となって取り組んでいるのが「福井県」である。



- ①至民中学校の体験授業の日、入学予定の小学6年生に向け、生徒たちが学校の特色をプレゼンテーションした
- ②至民中学校には、各教科担任が常駐する「教科ステーション」があり、生徒が気軽に相談に訪れたり、教員同士の打ち合わせも積極的に行われている
- ③開放的なつくりの至民中学校の校舎。校内には異学年型クラスターごとの垂れ幕が飾られている





①石田梅岩が軒端に出した招き行燈には、誰でも受講を歓迎した梅岩の思いが表れている。
 (右)御望之方ハ無遠慮 御通御聞可被成候 (左)女中方ハおくへ 御通可被成候 (提供: 心学明誠舎) ②心学明誠舎副理事長の中尾敦子さん
 ③心学明誠舎の定例早春セミナーでは、京都大学大学院教授の辻本雅史さんが石田梅岩の学問観などについて講義した

④⑦堺市戎之町の菅原神社境内には、1939年につくられた梅岩座像がある
 ⑤⑥関西商法の商道的伝統となって受け継がれる心学。大阪・船場の織維問屋街にて

大阪

して受け取る。それは武士の俸禄と同じだと梅岩は言い、身分制度や階級関係を超えた思想を示した。
 中尾さんは、紹介者不要で、誰にでも受講を勧めたことが受け入れられた、とも指摘する。「梅岩はマックス・ウェーバーの百五十年も前に、倫理的な資本主義の重要性と平等思想を訴えていたんです」。江戸時代、天下の台所として日本を支えた大坂の経済人、町人に、とりわけ心学に傾倒する者たちが多かったのも当然かもしれない。

グローバル時代を生きる企業人の心の拠り所に

それから三百年余り経った今でも、人々は心学を学びに足を運ぶ。大阪府立文化情報センター・さいかくホールで開かれた心学明誠舎の定例早春セミナーには、ネットワークを広げたいと考える中小企業の社長や商店主、若いビジネスマンなど五十人ほどの聴衆が来場し、熱心に梅岩の思想、生き方の話に耳を傾けていた。

心学明誠舎は一七八五年、大坂商人の三木屋太兵衛が開設し、現在は社団法人として大阪・難波に事務局を構える。経済人向けや一般市民向けのセミナーを開くほか、心学の歴史と思想、梅岩の考え方、生き方を伝える「心学道話」の語りや落語家の講話開催など、多彩な手法を用いて心学活動を行っている。

第二次世界大戦後には、戦後社会の人心の荒廃を憂えた教育者たちが、心学思想を取り入れようとした。その



一人、中尾さんの父で、経済学者の竹中靖一さんが普及に奔走。高度経済成長途上の一九六四年、竹中さんは「石門心学の経済思想」で学士院賞を受賞し、世間の心学への関心も高まった。そして八〇年代半ば、中尾さんが引き継いだ。周囲に「潰したらあかん。学問の灯は一回消したら、もうつかへん」と励まされ、細々と運営を続けた。
 近年、急速にグローバル化が進むなか、ピーター・ドラッカーの経営理念に比較されながら、商売への自負と「顧客満足」「企業の社会的責任」の実践を説く心学が、日本の経済人の心の拠り所として注目されるようになってきた。もともと社訓や家訓に生かされていた心学。「道徳と商業を結びつけた心学は、関西商法の商道的伝統となって大阪企業に受け継がれている」という声もある。
 中尾さんは語る——「利益優先の世界で、大阪商人のなかに根づいてきた『お客さまに喜んでもらったら、自分も喜びを持つ』という梅岩の教えは近年、韓国、中国でも注目されています。大阪の企業人に大阪を支える仕事人としての誇りがあれば、グローバル時代を生き抜けるはず」だと。商人の町としての歴史を歩み、企業人の誇りを伝え、育ててきたのが「大阪」である。

京都・祇園

芸を極める、花街の矚力

花街を支える置屋制度

「舞妓、芸妓として大切なのは心です。立ち座りや障子の開け閉め、お客さんとお喋りでも、心がこもってないと。相手の気持ちを察して、『この人、次こうしはったら喜ばはる』と思うことをするように」。祇園町の置屋の女将、松尾久枝さんはそう話す。例えば、部屋を出るときには電気を消す、お風呂を出るときには次の人のためにお湯を足すなど、普段の暮らしのなかで、さりげない心配りを積み重ねることが大切だと。

京都には五つの花街がある。なかでも花見小路を中心とした「祇園甲部」には、六十を超えるお茶屋があり、五花街のなかで最多を誇る約百人の芸舞妓がいる。

舞妓をめざす子は、置屋に仕込み（見習い）として住み込み、修業を積んでいく。「置屋さんの制度が、京都の五花街が今まで続いてきた根本だと思います。中学校を出た子たちを預かり、お稽古させ、京都弁を教え、躰る。舞妓ちゃんに出はるとなったら、衣装から何から損得抜きでつぎ込みはります」と言うのは、京都花街組合連合会会長の太田紀美さんだ。仕込みの期間が約一年。その後、舞妓になって四年間、さらに芸妓になって一、二年、年季が明けるまで置屋で苦業を共にする。

芸舞妓たちは、置屋の女将を「おかあさん」と呼ぶ。文字どおり、芸舞妓にとって、女将は育ての母。二十四時間、一緒に暮らすなかで、細かな心配りや作法を教えていく。「細々と言うことは大変やけど、気づいたらす

ぐ言います」と松尾さん。

また、舞妓としてデビューする前、同じ置屋出身の先輩芸妓（おねえさん）と姉妹関係を結び、以後、親身な助言、指導を受けていく。「お稽古してはつても、お茶屋での見習いでも、その子が怒られはつたら、おねえさんが謝りに行かはる」と太田さん。芸舞妓にとって、「おねえさん」は「おかあさん」以上に厳しく、頼りとする先達であり、家族である。ちなみに、舞妓見習いで数カ月通う見習い茶屋の女将も「おかあさん」。この三人が「お見世だし」といわれる舞妓デビューの保証人となる。

独自の教育システムで芸事を磨く

ピンと張り詰めた空気の中で、芸妓が舞う。井上流家元・五世井上八千代さんが見つめるなか、一人の芸妓が口元をきゅっと結び、厳しい表情で稽古をしていた。

続いて、春に行われる「都をどり」に向けた稽古が始まった。色柄とりどりの着物に身を包んだ二十数人の舞妓を前に、井上さんは、名前を呼びながら、手の振り、体の動きなどを指導。ときには自ら実演したり、弟子の前に歩みより、手ずから稽古を付けていった。

「お座敷でついた舞の癖を女紅場にようばでしつかり直していただいています」と松尾さん。祇園甲部の芸舞妓は、祇園で生きる限り、八坂女紅場学園で生涯学び続ける。芸の世界に終わりはなく、常に芸を磨くことが求められる芸舞妓たち。仕込みは舞踊のみで、舞妓になると、加え

て三味線などが必修

になり、ほかに芸

舞妓として知識を持つ

ていることが望ま

しいお花や書画な

どの稽古に励む。

芸妓は長唄などを

中心にさらに芸を

磨き、芸舞妓とも一科目につき月七

日間ほど稽古に通っている。伝統芸能の家元などが、基礎的な型を教えるが、「そのお師匠さんが近くにいてくれはるのはありがたいことです」と、学園理事長も務める太田さんは言う。こうした独自の教育システムで学び続けることが芸舞妓の成長を支えている。

太田さんは「京都の花街では、芸舞妓らを街全体、みんなの目で見守っています。その人が次どこに行かはつたか、みんなが見ててくれてはる。だから足あとがわかるんです。これはほんまに幸せなこと」と目を細める。

桃山期にできた茶屋を起源とし、文化・文政期に花開いた京都の花街。そこで築かれる、厳しさを秘めた濃密な人間関係によって、芸舞妓独特の仕草、振る舞い、さらには生き方を、世代を超えて、育み、伝えているのが「京都・祇園」である。



黒紋付の「お引きずり」で歩く祇園甲部の芸妓

- ①八坂神社の節分行事では、祇園甲部の舞妓たちが奉納舞を演じた ②奉納舞のあと、集まった参詣者へ豆まきをする舞妓たち
③八坂女紅場学園では、井上流家元・五世井上八千代さん(右)の指導のもと、舞妓たちが「都をどり」の舞を稽古していた
④京都花街組合連合会会長の太田紀美さん ⑤祇園町の置屋「多麻」の女将・松尾久枝さん(左)は、夕方、お座敷に出かける舞妓に一声かけて送り出す

京都・祇園



1



3



2



4



5



- ①12月16日、おん祭の「大和土宵宮詣(やまとぎむらいよいみやもうで)」では、大和土と流鏑馬児(やぶさめのちご)が若宮へ参詣する
- ②おん祭の「お旅所祭」での春日大社宮司の花山院弘匡さん(手前)と権宮司の岡本彰夫さん(右端)
- ③興福寺南大門跡で行われる「南大門交名の儀」に臨む興福寺の僧侶
- ④「遷幸の儀」のあと、17日午前1時から「暁祭」が始まり、「社伝神楽」が奉納された

伝統継承へ、春日大社が守り支える人材力

奈良

祈りあるものは、千年、二千年と続く

二〇一〇年十二月十七日午前零時。春日大社の若宮から続く参道は、すべての灯りが消され、漆黒の闇と寒気に包まれていた。「チーラー」。地を這うような声が近づいてくる。何十人も神職たちが列をなし、警蹕と呼ばれる掛け声を発しながら通り過ぎていく。

若宮神が本殿からお旅所に遷られる「遷幸の儀」。その厳粛な空気に誰もが圧倒される。大和国第一の祭礼「春日若宮おん祭」のメインとなる一日が始まった。

おん祭は平安時代の一三六年、飢饉や疫病などが相次ぐなか、時の関白・藤原忠通が五穀豊穰、万民安楽を祈って始めたとされている。春日大社と興福寺、そして大和国中の、武士や農民、商人、芸能者など、さまざまな職種の人々が力を合わせて、守り、育て、伝えてきた。以来、一度も途絶えることなく、今回で八七五回目を迎えた。

なぜ、これほどの大祭礼を続けることができたのか。「それは祈りです。祈りあるものは、千年、二千年と続きます」。春日大社権宮司の岡本彰夫さんは言う。

例えば、祭礼の存続が危ぶまれた明治維新直後、廃仏毀釈などで資金難に陥ったときは県内各所から寄付を募ったり、また芸能者たちが、「それまで支給されていた出勤料のお米をいただかなくても参ります」と率先して祭礼に参加したという。

「みんなが努力し、みんなが幸せになろうという、日本の価値観がそこにはあります」と岡本さんは語る。神の加護への感謝の気持ちを祭という形で伝える。そのような祭礼に奉仕してきた幾世代もの人々の真摯な祈り、真心が、おん祭の神事、芸能として結実し、時代を超えて受け継がれてきた。

人づくりで、古代の文化、技術を伝える

十七日正午、「お渡り式」が始まった。「日使」を先頭に、巫女、競馬、流鏑馬、大和土、大名行列などが奈良市中心部を練り歩く。日使とは藤原忠通が祭に向かう途中に病となり、お供の楽人にその日の使いをさせたことに由来し、一九九八年から関西財界のトップが勤めている。大名行列などには県内の企業や自衛官、子供たちなども参加。八百年以上経った今もさまざまな人々の手で守られているといえるだろう。

日使など祭の参加者は、二週間以上前から、肉類やネギのような匂いの強い野菜などを食べることを避け、身を清めて祭に臨む。古代から受け継いだ祭礼の型や作法を変わず守り続けることで、次の世代もまた伝統を継承していく。「細かな点にもこだわる民族だからこそ、こんな古い姿が残り得た」と、岡本さんは言う。



街の灯り物語

灯り——それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

例えば、春日大社の神楽には、年に一度、正月三日にだけ奉納される秘曲「神降ろし」の舞がある。「これは、簡素な舞やけど、古代の息吹きが込められている」と岡本さん。この神楽は、代々、ただ一人の巫女に伝えられてきた。

古代の息吹は社殿建築にも刻まれている。春日大社では二十年に一度、社殿などを修理する「式年造替」も一度も途絶えたことはない。二十年に一度だと、二十歳の息子が見習いで、四十歳の父が現場作業を担い、六十歳の祖父が棟梁として指導する。だから、貴重な大工の技と知恵、工夫を古代から現代まで連綿と伝えることがで



①②春日大社では企業や学校向けの研修も行っている。参加者は日本の伝統文化を肌で知り、時代や流行に翻弄されない姿を考える(提供: 春日大社)
写真下: 60回目の式年造替の一環として、2010年3月、国指定の重要文化財「直会殿」の屋根のふき替えが終わり、美しい桧皮(ひわだ)がよみがえった

きた。「式年造替の根底にある大事なことは、人を育て、技術を伝承する人づくりの制度」だと岡本さん。六十回目の節目となる式年造替はすでに始まっており、国宝の本殿の修理は二〇一五年に行われる予定だ。

「物を残しても、人を残さなかったら、何もありません。千二百年、コツコツと古代の姿を伝えてきたのが春日大社。これはお水取りを伝える東大寺でも同じです。神や仏に最高の礼を尽くすことが南都の悲願なんです」。古来の文化、技術に誇りを持ち、人づくりを着実に進めることで、伝統を守り、伝えてきたのが「奈良」である。

学校と地域社会、家庭が密接に連携し、子供を育てる「福井」、江戸時代から現代に通じる企業人の基本理念を保ち、地域に発信してきた「大阪」、桃山期のお茶屋のもてなしの文化を極め、その心を育む「祇園」、太古から祈りの生き方を守り、人々の幸せを願い、連綿と伝えてきた「奈良」——。時代を遡ると、どの地域にも独自の歴史があり、伝統の灯を受け継いだ人々が、また次の世代へと伝えていた。子育てに力を尽くすのも、伝統の技を伝え続けることも、彼らにとってはごく自然で、誰もがしている当たり前のことなのだろう。この関西の歴史と風土が生み出した、ユニークな人材育成こそが、明日の地域発展の原動力となっていくはずだ。



街の 灯り 物語



しんどう まさこ キャスター
1971年大阪府生まれ。神戸松蔭女子学院大学卒。94年TBSにアナウンサーとして入社。『NEWS 23』のスポーツキャスターや『ニュースの森』のキャスターを務める。2001年TBS退社。現在はフリーキャスターとして『がっちりマンデー!!』はじめ各メディアで活躍中。05年より母校の大学で非常勤講師。10年慶応義塾大学大学院メディアデザイン研究科修士課程修了。
<http://www.shindomasako.net/>

オンとオフ、 灯りで心を切り替えて 進藤晶子

キャスター

本

「面白いしますー」。キューとともに、眩しいほどに白く輝くライトの中に立つ——私にとって灯りは、テレビ現場の照明だ。ライトがついた瞬間に「仕事のスイッチ」が入る感覚は、終わったあとの爽快感とともに身体にしみついている。

思えば新人時代から、照明とともに経験を積み、成長してきた気がする。スタジオで、ヒヨコの格好での出演がたまらなく恥ずかしかったとき。初の生放送でガチガチになっていたとき。直前までどれほど不安や緊張が高まっていたも、ライトを浴びればパツと気持ちを切り替え、集中することができた。

そして取材現場——日本がサッカーW杯の初出場を決めたマレーシア・ジョホールバルの試合では、ほんの数人のスタッフで周辺の田舎町を取材した。街灯もなく裸足の人々が行き交うなかでも、ライトがつくと、即、仕事モードに。また初めて社会ニュースを担当したときは、高所恐怖症なのに高層ビルの上からレポートしなければならず、目眩がしたけど、ライトがついた瞬間に震えが止まった。仕事場の照明は、精神を研ぎすませ、集中させてくれる。

灯りはまた、沈みがちになる心を高揚させてくれたり、逆に興奮した心を静めてくれたりもする。人里離れた山奥で取材後に日が暮れてしまい、無

事に帰れるか不安になったが、ポツリと見えた民家の灯りに人の温もりを感じ、ああ帰って来たとホッとした。深夜に出勤するときは、キラキラした表参道のイルミネーションに励まされたこともある。あるいは夜のニュース番組に出ていた頃、生放送を終えて帰宅するのは深夜二時頃。けれど日中の取材やスタジオの熱気で気分が高揚し、眠れない。室内を柔らかな間接照明にしたり、アロマキャンドルを灯し、ようやくリラックスして眠りにつくことができた。

気持ちをコントロールし、精神的なバランスを保つため、灯りの効果は大きいと思う。

娘が生まれてからは、ますますオンとオフの切り替えを大切にするようになった。仕事場ではライトを浴びてシャキッとする分、家庭では落ち着いた灯りでゆったりと過ごす。

オフはホッとする灯りに包まれたい私も、桜の季節だけは別。関西に生まれ、京都のはんなりした桜の風情も大好きだが、それとは対照的に、物狂おしいほど華やかにあでやかに幻想的にライトアップされた千鳥ヶ淵の桜は、毎年の楽しみだ。灯りに照らされ、皇居のお濠いっぱいには桜が映り込み、一面、真っ白な桜づくしの世界……息をのむほどの美しさに圧倒される。今年は、春から幼稚園にあがる娘も連れて、家族で見にいきたいと思っている。 **曜**



「ハッチが開いた瞬間、土と草のにおいが強烈だった。
(地球の空気は) おいしいですね」
国際宇宙ステーションに五カ月半滞在した宇宙飛行士
の野口聡一さんが、地球に帰還したときの言葉だ。
なつかしい「地球の香り」、それはやはり、土と緑か
ら醸成されたものなのかもしれない。文明を持たない頃、
まず最初に私たち人間を受け入れてくれたのは、豊かな
土地だっただろうから。

宇宙に最も近い島、 種子島で宇宙と地球を考える



▼赤米をもたらしたとされる玉依姫たまよりひめを祀る宝満神社、聖域とされる宝満池。約5万㎡、島内で最大の面積を持つ淡水湖は、美しいというには畏れ多いほど清明である。鬱蒼と木々が茂る山に囲まれた鏡のような池に、渾渾と真水が湧き出すという

インギー鶏もまた、舶来だ。台風や季節風の関係で、種子島には海難船が多い。1894年、イギリスの帆船が座礁、その救助のお礼にもらい受けた。イギリスではなく中国広東省の原産というが、現地ではすでに血統が絶えたので、今では種子島にしかない。体格は普通の鶏より大きく立派、羽根は茶色く、尾が渦を巻いて短く見える。先祖がもらい受けた鶏を代々守ってきた飼主の寺内昭徳さんは黒毛和牛も飼う畜産農家だ(写真下)。



島の南に位置し、種子島宇宙センターがある南種子町は、人口6,000人余り。古くは鉄砲伝来、現在は日本唯一の実用衛星打ち上げ基地——と、歴史と未来が共存する町だ。町役場企画課長で種子島宇宙開発促進協議会事務局長も務める河口恵一郎さんは、種子島宇宙センター建設開始当時、小学一年生。町で賑やかに提灯行列が行われたのを覚えているという。河口さんに案内いただき、歴史ある美しい島を巡った。



◀種子島はサーフィンの名所だそうで、サーファーの移住者が400人もいるとか。大阪出身で町役場で働く小早 太さん(右)もその1人

▲赤米館。小脇有希乃さんに話を聞いた

南の島の豊かな自然

羽田を飛び立った旅客機は、白い煙を上げている新燃しんもえ岳を大きく回避しながら、一〇分遅れで鹿児島空港に到着。プロペラ機に乗り換えて約三五分で種子島空港だ。

気候も気温も変わらない。最高気温一〇℃程度の冬の日で、南の島というイメージからはほど遠い。しかし、草木の形は、いつもと微妙にちがう。

ガードレールに干された大根は田舎によくある風景だが、サトウキビ畑、バナナの木、茶畑、芋畑、水田が連なる。雑木林には見慣れた広葉樹の中にも、初めて見る榕あじろの木。ところどころにソテツやヤシも見られる。あく抜きしないでも美味しく食べられるというタケノコの一種、琉球竹りゅうきゅうたけがこちらに生えている。

南種子町・平山の水辺には、メヒルギ(マングローブ)の自生林が広がっていた。鉄砲伝来の地・門倉岬では、ヒゲのような気根を垂らすガジュマルの木をくぐった。なんと多彩で豊かなのだろう。

案内してくださった南種子町役場企画課長の河口恵一郎さんによると、日本に自生する南の植物の北限、北の植物の南限なのだそう。だから、すべての植物が混在する。メヒルギは海水に浸る土地に繁茂するというから、この土地は海の豊かさまで孕んでいる。

種子島は飢饉を経験したことがないという。

たねがしま赤米館(あかごめミュージアム)に、『日

本書紀』の種子島に関する記述が展示されている。「筑紫の南の海中にある。住民は髪を短く切って草の裳もをつけている。稲は常に豊かに実り、年に一度植えれば二度収穫できる」。米は現在では二度収穫しても売れないため刈り取ってしまうが、実際、二期作ができ、さらに三度目の芽まで出てくるというから、本当に豊かな土地だ。毎年毎年の神事に供えられる赤米は門外不出だが、食べやすく改良したものはお土産用に売っている。白米に一割程度混ぜて炊くと、ほのかに桜色に染まり大変美味しい。種子島といえば、一五四三年の鉄砲伝来で知られるが、稲作のルーツとなった古代米の赤米もまた、古いにしえの昔、南のジャワから渡ってきたのである。

ロケットの町

今年(二〇一一年)一月二十二日、種子島宇宙センターから、国産ロケットH-II Bの2号機が打ち上げられた。無人補給船「こうのとり」が、国際宇宙ステーションへ物資を運ぶ。町には、打ち上げ成功を祝う横断幕が意気揚々とあった。

種子島宇宙センターは、一九六九年、宇宙開発事業団(現・宇宙航空研究開発機構JAXA)の発足とともに設立された。ロケット打ち上げは赤道直下が最適なのだが、国内で赤道に最も近い沖縄は当時、返還前だったため、種子島が選ばれた。

現在、種子島宇宙センターで働く人は関連企業を含め



JAXA種子島宇宙センター。970万㎡の広大な敷地に、大型・中型・小型ロケットの発射場、地上試験や追跡管制などの施設を整備。固体および液体エンジンの地上燃焼試験、ロケットや衛星の組み立て・整備・点検など発射前作業、そして打ち上げ、打ち上げ後の追跡管制業務など一連の作業が行われている。ここ種子島宇宙センターに加え、大隅半島にある内之浦宇宙観測所も統括する鹿児島宇宙センター所長の坂爪則夫さんに案内してもらった。



◀燃焼試験の激しさがうかがえる液体エンジン試験場
▼大型ロケット組立棟の引き戸は、世界最大ということでギネス認定だそう



▲JAXAでは広報、町の鉄砲伝来記念式典では鉄砲隊を務めるという管理課主査の日高智洋さん(中)

▶小型ロケット発射場にはかつてのTR-IAロケット「たけさき」のランチャー(発射装置)も展示



日本の技術を宇宙へ

島の東南端、竹崎海岸を下に見ながら、道はいつの間にか種子島宇宙センターへ。総面積約九七〇万㎡にもおよぶ日本最大のロケット発射場だ。広大な敷地内を走る道路がクネクネ曲がっているのは、自然景観を損なわなため。空、海、緑に包まれた岬の合間に大型ロケット発射場がぽっかり現れる様は、「世界で一番美しいロケット発射場」といわれるのもわかる。

「世界のロケット開発は軍事用ミサイル技術の応用で四五〇人ほど。宇宙関係の経済効果は約一二〇億円。『私たちは宇宙開発とともに生きている。町をあげて応援しているんです』と、種子島宇宙開発促進協議会事務局長でたねがしまロケットマラソン大会事務局長も務める河口さんは笑う。漁業への影響などを考慮し、これまで年間一九〇日に限っていたロケット打ち上げ期間を今年四月から通年とするのも、協力体制の現れだろう。地元では二月にロケットマラソン、三月に宇宙検定とロケットコンテスト、夏にはロケットまつりなど、JAXAとともにロケット関連のイベントを行っている。また九六年から小学生の「宇宙留学」制度を設け、島外の子どもたちを受け入れている。毎年、四倍もの応募があるという。豊かな自然の中で、シーカヤックでの川遊びやロケット打ち上げ見学など、親元を一年間離れての生活は、すばらしい経験になるに違いない。

島の東南端、竹崎海岸を下に見ながら、道はいつの間にか種子島宇宙センターへ。総面積約九七〇万㎡にもおよぶ日本最大のロケット発射場だ。広大な敷地内を走る道路がクネクネ曲がっているのは、自然景観を損なわなため。空、海、緑に包まれた岬の合間に大型ロケット発射場がぽっかり現れる様は、「世界で一番美しいロケット発射場」といわれるのもわかる。

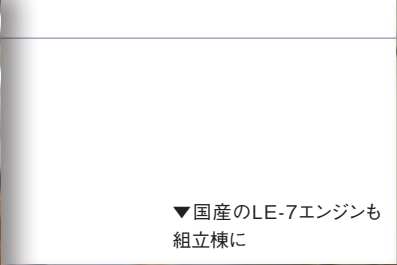
「世界のロケット開発は軍事用ミサイル技術の応用で

2011年度は夏以降に4機の打ち上げが予定されている大型ロケット発射場を、坂爪所長に案内いただいた

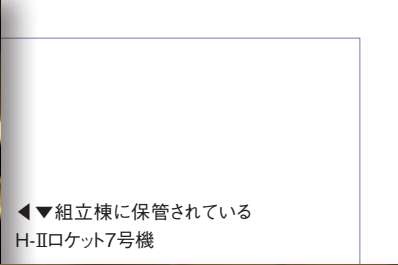




無料で一般公開されている宇宙科学技術館。野口聡一さんたちが滞在した「きぼう」日本実験棟の実物大模型（写真右）をはじめ、日本のロケット技術の変遷がわかるコーナー、LE-7エンジンの実物、ロケット打ち上げシアター、月球儀、月体重計などがあり、宇宙へのロマンがかきたてられる。さらに宇宙食や宇宙服も買えるミュージアムショップ、ゲストハウス（食堂）も併設。すっきりと立った白いロケットが目印。



▼国産のLE-7エンジンも組立棟に



◀▼組立棟に保管されているH-IIロケット7号機



▲月球儀上には月探査機のミニチュア模型も



▲宇宙科学技術館



▲総合指令棟の管制室

発達した経緯もあり、ロケット先進国からは、日本がいくら頑張っても国産ロケットなどできるものか、と思われていたんです」と、JAXA宇宙輸送ミッション本部鹿児島宇宙センター所長の坂爪則夫さん。国産ロケットエンジンの開発など、ロケットとともに半生を歩んできた方だ。

アメリカからの導入技術で始まった日本のロケット開発は、八四年、すべて自主技術による「純国産」をめざしてH-IIロケットの開発に着手。坂爪さんは打ち上げの成否を左右する第一段エンジン（LE-7）を担当したが、軽量化と高効率化や耐久性確保など開発は困難を極め、九四年、ようやく打ち上げに成功したという。

開発はその後、コスト低減をめざすH-IIA、大型化を図るH-IIBへと進化していくが、最も辛かったのは、H-IIロケット5号機および8号機の連続打ち上げ失敗だった。何しろ莫大な費用をかけたロケットが一瞬にして消え去ったのだから、当時の世間の非難たるや、相当なものであったらしい。

痛みを伴う代価

鉄砲伝来は、日本人が初めて西欧の科学技術に触れ、その価値を感じ取り、たちまちにして技術を習得した歴史である。この鉄砲伝来の地で、国産ロケットの開発が進められたことに、不思議な符号を感じる。

一つの技術を別の国で開発することは、本当に大変な

ことだ。模倣といったなまやさしいことでは、ものはいつくない。種子島は良質の砂鉄の産地で、製鉄技術のベースがあった。上方との関係も深く、島には刀鍛冶がいた。当時の技術先進国だったのだ。

同時に思い出したのは、島に伝わる若狭姫の伝説。

若き十四代領主・種子島時堯から、鉄砲をつくるよう命じられた島の刀鍛冶、八板金兵衛は技術者の誇りをかけて取り組むが、どうしても筒の一方をふさぐ方法がわからない。ポルトガル人に尋ねると、娘を嫁にくれるならという条件でネジを切る技術を教えてくれる。この娘が十六歳の若狭姫。若狭はポルトガル人の妻になるが、帰国したときに病気で亡くなったという。

若狭姫の伝説が心に響くのは、大きな宝を得るときには、痛みを伴う代価を払わねばならないという、動かしがたい道理を表しているからだと思う。

宇宙と地球をつなぐ

打ち上げ失敗を受けて、H-IIロケットを廃止。打ち上げられなかった7号機が、格納庫に納められていた。これが、非常に精巧でありながら、同時に、手づくり感満載なのである。高温に強い合金で一つ一つ精巧につくられた部品に、熱対策でアルミ箔が巻かれていたりする。

あの還ってきた小惑星探査機「はやぶさ」のブーム以来、暗い宇宙を渡る衛星はどこか健気な感じがするが、こんな手づくりのものが宇宙を飛んでいるのかと胸が熱



種子島空港近くの地に、74年に設置された増田宇宙通信所。構内には、「だいち」や「いぶき」などの人工衛星追跡用とロケット追尾用の「パラボラアンテナ」が7基、点在している。各パラボラアンテナは衛星やロケットの状態・位置・姿勢などのデータを受信するほか、衛星の動きに修正が必要なときは指令信号を送り制御(管制)している。「だいち」は1月19日に新燃岳の噴火を観測し、その後も観測を続けているという。



▲ロケットや衛星の模型が並ぶ展示室もある、増田宇宙通信所

くなる。

液体エンジン試験場では、何度も繰り返される燃焼実験の激しさが、くっきりとコンクリートに残っていた。

年間一〇万人が訪れる宇宙科学技術館には、国際宇宙ステーション内の「きぼう」の実物大模型もあり、中に入るができる。居住区は別というが、大型バスほどの白い空間は極めて人工的で、ここに何カ月も滞在するのは厳しいだろうなあとと思う。地球の香りを喜ぶ野口さんの言葉がよみがえる。

センターでは今、宇宙開発と地球環境保全の両立に取り組んでいる。周辺景観の保全はもちろん、ロケット打ち上げに伴う環境負荷を低減するため、ロケットのコアエンジンは燃焼後、水蒸気しか発生させないピュアなエンジン。打ち上げ準備作業では代替フロンを使用するなど、環境への配慮は怠りない。

●
人類の宇宙への夢を乗せてロケットを打ち上げるとともに、宇宙に送ったロケットや人工衛星を監視する——島の中央、東側にあるJAXA増田宇宙通信所では、陸域観測技術衛星「だいち」や高速インターネット衛星「きずな」、温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」など多くの人工衛星を追跡し管制を行っている。

人工衛星を追って、ゴーツとパラボラが動くのを見た。予想外に素早い動き。人工衛星のスピードは、東京—大阪間を一分というから、追跡するのも大変なのだ。

増田宇宙通信所を案内してくださった郁敏英さんは、

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社 取締役会長)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 地域共生・広報室
発行人／八嶋康博 編集人／横山実果
〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ピー

*今号の取材は2011年2月28日までに実施したものです。



▲メヒルギ



大原 まり子 おおはら まりこ
1959年大阪府生まれ。聖心女子大学文学部教育学科心理学専攻卒。
80年『一人で歩いていった猫』で作家デビュー、以来、スケールの大きいモダン・スペース・オペラの旗手として活躍。『戦争を演じた神々たち』で日本SF大賞、『インディペンデンスデイ・イン・オオサカ(愛はなくとも資本主義)』で星雲賞受賞。99～2001年日本SF作家クラブ会長。他の著書『銀河郵便は“愛”を運ぶ』『ハイブリッド・チャイルド』『タイム・リーパー』『アルカニック・ステイツ』『みつめる女』ほか。
<http://park6.wakwak.com/~ohara.mariko/welcome.htm>

筑波宇宙センターに勤めたが、故郷の種子島勤務を希望して戻ってきた。通信所の管制部の仕事の他に、先祖伝来の土地でサトウキビなどの作物を栽培し牛も飼う畜産農家を営む。
いつかは還りたいと思う、ふるさとがあることの幸せ。そのふるさとに還り、暮らしを立てることの幸せ。この二つの幸せを手にする人は多くない。
いつか、数世紀のうちには、種子島宇宙センターから地球を離れ、遠い星から地球を想う、そんな人たちが現れるのかもしれない。

▼ロケット打ち上げ時には射場から半径3kmは立入禁止になるが、南種子町内には、彼方まで芝生の広がる長谷公園、宇宙ヶ丘公園など展望スポットがある

種子島宇宙センターの小型ロケット発射場の下に広がる竹崎海岸(写真上中)。透んだ青と砂浜の広がる海水浴場でありながら、けっこう波は高い。彫刻作品のような巨大な砂岩が、透んだ青の海にせり出している。冬の日。誰もいない真っ白な砂浜に、自分だけの足跡を残すのは何か申し訳ないような、それでいて大きな自由を得たような、不思議な気持ちになる。